神戸女学院大学音楽学部
アウトリーチ通信

第３号
2006年５月20日発行
神戸女学院大学音楽学部
アウトリーチ・センター
〒662-8505
西宮市岡田山4-1
電話：0798-51-8584

今年度の計画

神戸女学院大学音楽学部教授
アウトリーチ・センター・ディレクター
津上　智実

新年度が始まりました。今年は長く楽しませてくれた桜の花もさすがに過ぎて、本格的に授業が始まりました。今年度のアウトリーチ活動について計画の全体像を概観してみましょう。

一．関連授業の開講

アウトリーチ関連の新規授業として、前期に「アートマネジメント」（藤野一夫先生）、「リトミック」（田村朋子先生）（六～七頁の紹介記事参照）、後期に「発達心理学入門」（武知優子先生）が開講されます。「アートマネジメント」の授業ではさっそく五月十五日にテノールの佐野成宏さんをゲスト・スピーカーに迎えるなど、ダイナミックな授業展開が期待されます。

七月にはニューヨークのジュリアード音楽院作曲科主任教授エドワード・ビーラウス先生をお迎えして、アウトリーチ基礎教育のワークショップを二週間にわたって開く予定です。

また私が担当する「音楽によるアウトリーチ（実習）」にも新任の非常勤講師として絹田朋子先生（本学卒業生、アウトリーチ一期生）を迎え、前期は二人三脚で進めていきます。

二．長期プロジェクト

小中学校や病院等への個別のアウトリーチに加えて、地道な長期プロジェクトの計画が目下、三つ進みつつあります。

まず「養護学校プロジェクト」。これはヴァイオリニストの五嶋みどりさんからの提案で始まった年間プロジェクトで、今年度は兵庫県立こやの里養護学校の小学部を学生たちが定期的に訪問する計画です。六月十六日にはこやの里養護学校で五嶋みどりさんとピアノの及川浩治さん、そして学生をまじえたレクチャーコンサートも予定されています。

次に「ひよこプロジェクト」。これは英語の歌とリトミックで子どもたちに外国語の響きとリズムに慣れ親しんでもらおうとするもので、西宮市立子育て総合センター附属あおぞら幼稚園の協力を得て、英文科と音楽学部の学生が取り組む構想です。

最後に「吹奏楽プロジェクト」。これはフルートの学生が中心となって、近隣の中学校や高等学校の吹奏楽部に定期的に出向くもので、西宮市吹奏楽連盟の協力を仰いで、今後具体化に向けて努力していくつもりです。

三．子どものためのコンサート・シリーズ

シリーズ五年目の今年も、四年生が企画・出演する「子どものための七夕コンサート」（七月一日）、パイプ・オルガンの魅力を伝える「子どものためのオルガン・コンサート」（十月二十一日）、今春の卒業生が出演する「子どものためのクリスマス・コンサート」（十二月十六日）の三回を予定しています。

四．アウトリーチ・センターの体制強化

アウトリーチ・センターの立ち上げから半年が経ち、多種多様のアウトリーチ活動を平行して円滑に進めていくためには、スタッフ間の情報の共有が何より大切であることがはっきりしてきました。目下、ファイルメーカーを導入して情報共有システムの構築を急いでいるところです。豊かな演奏機会の提供としっかりしたサポート体制をめざしてがんばります。

今年度の活動が学生たちにとって、また地域にとっても実り多いものとなりますよう、皆様方のご理解とご協力をお願い申し上げます。

アウトリーチ実習報告

宝塚市立すみれガ丘小学校

三月六日（月）、十三日（月）の両日、宝塚市立すみれガ丘小学校（小西康広校長、音楽教諭・松原美保先生）にて、クラス授業実習が行なわれました（六日：フルート・今井さつき、上原梨絵、山上綾華／ピアノ・白木千裕／十六日：声楽・高林保子、嶋田友里恵／ピアノ・藤村真代）。

初日は、フルート独奏のほか、アルト・フルートやピッコロとのアンサンブルを題材とした授業を行いました。楽器体験コーナーも設け、それぞれの楽器の大きさや音色の違いに子どもたちは興味津々の様子でした。十三日は、音楽の教科書にあるヘンゼルとグレーテルの二重唱〈踊りましょうよ〉を題材とし、授業を展開。全員で歌い、一緒に体を動かすことで、学生と子どもたちが一体となって作品を楽しみました。松原先生のご指導のもと、各時間ごとに反省・修正を加え、よりよいプログラムに仕上げていきました。

フルートの楽器紹介

ヘンゼルとグレーテルの二重唱

学生からは「子どもたちと触れ合い、話し方など様々な点でいい勉強になった」「先生の子どもたちへの接し方を見てとても参考になった」「場の雰囲気を察知して対応する大切さを学んだ」「ただ演奏を聴いてもらうのではなく、何かを感じてもらうようにすることが大切だと思った」などの声が聞かれました。このような学びの機会を与えてくださったことに感謝します。

みんなで歌いましょう

（寺澤彩・記）

甲東地区青少年愛護協議会

三月二十一日（火）、甲東小学校体育館にて、甲東地区青少年愛護協議会（茂木三夫会長）主催の第十四回ふれあいコンサートに参加しました（ピアノ・城沙織、三村祥子）。

ふれあいコンサートは甲東地区の地域の方々によって作られているコンサートです。牛尾真規子さんの司会のもと、甲東小学校図書ボランティアによる劇、甲陵中学校生徒による合唱、吹奏楽、雅奈会と甲陵中学校生徒による三味線演奏、甲東小学校ＰＴＡコーラスによる合唱等が披露されました。本学からはピアノのソロと連弾でモーツァルト、ドビュッシー、ブラームスの曲を、お話を交えながら演奏しました。学生からは「ふだん一生懸命取り組んでいるピアノを通して地域の方々、幅広い年齢の方々に喜んでいただけたことがうれしかった」「お話をまじえながらの演奏は初めてでむずかしかったけれど、聴衆との距離が縮まって、より楽しんでもらえることが分かった」「子どもたちを惹きつけられる演奏の仕方や曲の選び方をもっと考えていきたい」などの声が聞かれました。

会場の様子

地域の方々と共に演奏するよい機会を与えられたことに感謝します。

（早野紗矢香・記）

ピアノのソロで

ワークショップ

第三回 マイケル・スペンサー氏 原田クマ氏 「クリエイティブ・コミュニケーション・ワークショップ」

二月八日（水）、ヴァイオリン奏者でファシリテーターのマイケル・スペンサー氏、ベース奏者でファシリテーターの原田クマ氏をお迎えして、雲雀丘学園小学校（岩崎優校長）の多目的室および体育館でワークショップを行いました。

これは、学生が音楽専門教育のなかで身に付けた力をファシリテーター（子どもたちの活動をうまく誘導する人）として発揮することで、自分の音楽的な力をどのように生かすことができるかを体験的に学び取るためのワークショップでした。

マイケルさんとクマさん

まず始めに学生のための導入ワークショップが行われ、イギリスでのアウトリーチ事情、クリエイティブ・コミュニケーションについて話を聞いた後、実際に体を動かすことで学びました。次に、雲雀丘学園小学校の五年生とのワークショップを実際に体験し、最後に今回のワークショップについて、講師お二人と小学校の音楽教諭をまじえてのディスカッションを行いました。

始めの導入ワークショップでは、スペンサー氏が突然アフリカの歌を歌い出し、そのメロディーを参加者全員が耳で覚えて歌いました。聴き慣れないリズムと旋律だったので、日頃楽譜から音楽を読み取る習慣の学生たちにはむずかしく、覚えるのに少し時間がかかりました。歌を覚えたところで、振りを習い、輪になって踊りました。その後、八人ずつのグループに分かれ、グループ毎にこの歌に新しい踊りを考えるという課題が出されました。思ってもみない課題に戸惑いながらも、アイディアを出し合って踊りを作り、それぞれ発表して、論評しあいました。次に、「音楽によるアウトリーチ」のイメージを体で表現（ストップ・モーション）せよという課題が出され、三つのグループがそれぞれのコンセプトで群像を作って発表しました。自由に創造して表現することの楽しさが分かってきて、みな目が輝き出し、表情が生き生きとしてきました。

アウトリーチのイメージを体で表現する！

ヴァイオリンを取り出して

小学生とのワークショップでは、スペンサー氏のヴァイオリン演奏で子どもたちを引き込んだ後、「きつねとうさぎ」の追い駆けっこゲームをしました（このゲームによって子どもたちの性格や人間関係を読み取ることができると教わりました）。続いて、歌を歌いながら体を動かすゲームを全員でしました。次に大学生と小学生が混合で八つのグループに分かれ、①小学生は大学生にインタビューして後でみんなに紹介すること、②トーンチャイム等を使って自由にファンファーレを作ること、この二つが課題として出されました。ここで学生たちは、子どもたちのアイディアを上手に引き出して、グループとしてまとまった作品に仕上がるよう助力するという役割を担いましたが、日頃小学生と接する機会も少ないため、勝手が分からず苦労したようです。終わりに小学生がグループ毎に大学生を紹介し、ファンファーレを発表しました。

グループで自己紹介

最後のディスカッションでは今日のワークショップに対する戸惑いや驚き、発見や疑問などが率直に出され、理解を深める時間となりました。

参加学生からは「慣れていないことの連続で、挑戦することも多かったが、とてもよい経験になった」「音楽とは楽譜を読むことから生まれるのではなく、体で感じること、イメージを持つことによって生まれてくるものなのだろうと思った」「始めの方では体を使って表現することはすごく苦手だと感じたが、みなで動いているうちに自分で驚くほど、楽しさや喜びが自然に出てきて、音楽が楽しいのだという感情が単純な体の動きでわきあがったことに驚いた」といった声が寄せられました。

このワークショップにご協力いただいた雲雀丘学園の教職員のみなさま、とりわけ雲雀丘学園小学校音楽教諭の山本雅子先生、岡村圭一郎先生に心から御礼申し上げます。

（早野紗矢香・記）

ファンファーレを発表する！

イギリス視察報告

～ロンドンのアウトリーチ活動～

津上 智実

二〇〇六年三月七日から十五日まで、アウトリーチ活動の伝統の長いイギリスに視察に行ってきました。訪問先はロンドンで、①現場でどのようなアウトリーチ活動を展開しているのか、②その準備として学生にどのような教育を施しているのか、③大学としてどのような体制で取り組んでいるのか、この三点を知るのが目的でした。

まず、昨秋のアメリカ視察の際にロンドンならここを訪問しなさいと勧められたロンドン・シンフォニー・オーケストラ（ＬＳＯ）とロイヤル・カレッジ・オブ・ミュージック（ＲＣＭ）、そしてギルドホール・スクール・オブ・ミュージック＆ドラマ（ＧＳＭＤ）を訪問しました。

ＬＳＯはバービカン・センターに本拠を置くオーケストラですが、そこから歩いて十分くらいの古い教会（聖ルカ教会）を買い取ってアウトリーチ活動専門の拠点としています。外見とは裏腹に中は驚くほど近代的で、子どもたちがミキシングを体験できるコンピュータ・ルームまで備えられています。あいにくオーケストラは日本公演中で、団員による活動は見ることができませんでしたが、子どものためのガムラン教室を見学。ガムランは初めてという子どもたちを多層的な集団アンサンブルへと導いていく手腕は、豊かな経験に裏打ちされたものと見受けました。

ＬＳＯの聖ルカ教会

ＲＣＭは音楽事典でその名を知られるサー・ジョージ・グローヴが学長を務めていた由緒ある王立音楽学校で建物も重厚です。ここでのアウトリーチ活動はどちらかというと就職課寄りで、カリキュラムには組み込まれていません。オフィスにはマネジャーの下、アウトリーチ担当、外部演奏派遣（出演料が出るもの）担当（二名）、プロモーション・マーケティング担当、ウェブサイト・出版物担当、卒業生ネットワーク担当の計六名がそれぞれデスクや部屋を構え、説明のリーフレットなど学生への情報提供も充実していて、そうした面で見習うべき点が多々ありました。

今回の視察で最も収穫があったのはＧＳＭＤですが、実は事前に日本から何度問い合わせても返事がなく、様子が分からないまま渡英しました。するとＬＳＯのエデュケーション・プログラムの責任者が、最近ＧＳＭＤはすばらしい教育をしていて、そこからオーケストラに入ってきた演奏家は事前教育なしにすぐさまアウトリーチ活動に出て行くことができると言って、その場でメールと電話を入れてくれました。その日の夕方、ようやく担当者と携帯電話で連絡がついて、その後三回のＧＳＭＤ訪問に繋がりました。ネットワークの大切さ、分刻みで飛び回る人と人とを結ぶメールと携帯電話の威力を改めて感じました。

ＧＳＭＤでのリハーサル

翌日、ＧＳＭＤの担当者から話を聞いて驚きました。ここでは一九八四年に選択コースとして始まったアウトリーチが、一九九七年からは全音楽学部生の必修科目となり、二〇〇二年に作曲やピアノに並ぶ部門として独立し、二〇〇四年には修士課程を立ち上げて、もうすぐマスターの第一期生が修了するというのです。専攻生がいるのは修士課程のみで、学部生は皆何らかの主専攻（楽器、歌、作曲）のかたわら、第一、三、四年次でアウトリーチについて学びます。

リハーサル会場の様子

ちょうど翌週の火曜日（帰国日！）のお昼に、地域の子どもたちを巻き込ん

での音楽活動の集大成としてバービカン・センターでコンサートをするというので、日曜日のリハーサルと火曜日の舞台とを見学させてもらいました。集団の中でリーダーシップを発揮する音楽家を育てることに力点を置いた教育であることがよく分かりました。なお、国際交流も活動の柱の一つとのことで、今後ブリティッシュ・カウンシルや日本財団に働きかけて交流の可能性を探っていこうという提案を頂きました。

もう一つの大きな成果は、三十年近い歴史と高い社会的評価を誇るアウトリーチ専門団体ライブ・ミュージック・ナウ！のコンサートを見学し、ロンドン支部局長から話を聞くことができたことです。コンサートはロンドン郊外の教会で地域の障害者を対象としたもので、演奏したフルートとハープの二人は年間百回程このようなコンサートをしているとのこと。支部局長からは、ゆったりした中庭でおいしい紅茶を頂きながら、演奏派遣の割当のコツ、経済基盤、音楽家のアウトリーチ教育等について話を聞くことができました。

ライブ・ミュージック・ナウ！のコンサート

他にウィグモア・ホールのファミリー・コンサートを見学したり、最終日の朝九時に駅で待ち合わせして、ロンドン・フィルハーモニー・オーケストラのエデュケーション・プログラム担当者にようやく会うことができたり（ここでもコラボレーションの提案を頂きました）、帰国ギリギリまで目一杯の視察となりました。その成果を今後の活動にぜひよい形で生かしていきたいと思っています。

アウトリーチ海外通信

～プロフェッショナルへの道！～

絹田 朋子

「ライブ・ミュージック・ナウ！（以下ＬＭＮ）」――そのものズバリのネーミングですが、これは一九七七年ヴァイオリニストのユンディ・メニューインによって設立された、イギリスで最大のアウトリーチ組織です。ＬＭＮの第一の目的は、日本で最近注目されているアウトリーチ活動と同じように、ふだん音楽会になかなか行く機会のない人々のためや、もっと音楽を身近に感じてもらう機会を増やすため、演奏家が音楽の出前演奏をすることです。同様に、そうした出前演奏会の場を多数踏ませることによって、若い演奏家を本物のプロフェッショナルな演奏家に育てようという役目も果たしています。

ところで、「本物のプロフェッショナルな演奏家」とは、一体どのような人のことでしょうか。ＬＭＮでは、小さなコンサートの場をできるだけ多く演奏家たちに提供し、演奏家自身が将来の目標を探し出す助力をしてくれています。

ＬＭＮ所属演奏家として「本物のプロフェッショナル」をめざす演奏家たちが自分たちのコンサートをどのように組み立てていたか、二〇〇六年十二月に見学した二つのコンサートからレポートします。

ライブ・ミュージック・ナウ！のオフィスのある建物

○十二月六日（火）十四～十五時／マイケル・ソーベル・ハウス（ガン病棟内にあるホスピス）／サリー・プライス（ハープ）、クレア・ファインドレーター（フルート）

ロンドン郊外の草原の片隅に位置する病棟にて、静かに始まったフルートとハープのコンサート。この時期のイギリスは日暮れが早く、午後二時をまわるともうすでに夕方の空気が漂います。フルートのクレアが中心となり観客に一つ一つの曲を説明しながらゆっくりとプログラムを進めてゆきます。選曲はオペラやミュージカルの曲をフルートとハープ用に編曲したものが中心で、優雅

で静かで自然と眠りを誘うコンサートでした。数人の観客が心地よい夢の世界に入った頃、クレアの提案でリクエスト・コーナーが始まりました。これは観客を目覚めさせるにはとてもよい案と思われるのですが、観客と演奏者が初対面の場合、観客はどんな曲をリクエストしてよいか途方に暮れることが多いので、観客からのリクエストをコンサートの間に募ることは、案外むずかしいものです。今回も、一瞬観客が黙り込んでしまいました。しかし、その時のクレアの対応はとても要領を得たものでした。

観　客「…どんな曲を選べばいいか…あまり詳しくないし…。」
クレア「では、クラシックとポピュラーとどちらがいいですか？」
観　客「クラシックですかねえ。」
クレア「では、にぎやかな曲と静かな曲、どちらがよいですか？」
観　客「ええ～どちらも聞きたいので両方！」

こんな風に、具体的な曲名でなくイメージで選曲を導くのはとてもよい方法だと思いました。今回のコンサートでは、観客は受け身であることを、またリラックスすることを期待していたので、選曲の主導権を観客に委ねるということ自体が適度な刺激となり、コンサート終了間近には演奏者と観客がお互いに曲や演奏の感想を語り合うこともできるようになりました。

ギリシア・ダンス

○十二月八日（木）十五～十六時半／スプリングヴュー・レジデンシャル・ホーム（要介護老人ホーム）／プラスティック・チェアーズ（ブズーキ、バグラマ、ギターのギリシア弦楽器音楽トリオ）

さすがギリシア人。真冬の薄暗いロンドンに地中海の太陽を連れてきました。全てが暑い、熱い、篤い。演奏者は演奏しながら喋り、歌い、踊ります。少々強引すぎるのではないかという勢いで、全ての観客を自分たちの音楽に取り込もうとします。最近自分で歩くことができなくなったというおばあさんの手を取り踊り出そうとした瞬間、おばあさんは勢い余って転倒。一瞬、会場全体に戦慄が走りましたが、「これも振り付けの一部だから～」と陽気に助け起こし、その後もダンスを継続。運良くおばあさんも自分の体が案外丈夫だということを知り、みごと初体験のギリシア・ダンスを踊りぬくことができました。その後は他の観客も急に積極的になり、会場は（ふだんはゆっくりとお茶を楽しむカフェ談話室なのですが）まるで盆踊り大会のような雰囲気に。このコンサートでは、「ギリシア音楽」という聴衆にとっての新鮮さを上手に利用し、聴衆に音楽を超えた新たな可能性を気付かせることのできる機会となっていたように思います。観客はジェットコースターに乗っているような気分でスリルを楽しんでいたように見えました。

おばあさんを巻き込んで！

二つのコンサートにおいて焦点となっていたことは、それぞれ自分たちの演奏を通し、いかに観客とコミュニケーションをとるかということでした。すばらしい演奏技、新鮮なアイディアによって、コンサートのひとときを観客に楽しんでもらえること、それが「本物のプロフェッショナルな音楽家」に求められている条件の一つではないかと感じました。

アウトリーチ関連
新開講授業・担当講師紹介

◎アートマネジメント
（月曜日三限）

芸術・文化と国家・社会との複雑な関係を明らかにし、過去の反省を踏まえて、新しい時代の文化環境のあり方を議論します。国際化とともに分権化が進む現在、芸術・文化の魅力を社会に広め、またその力で社会を活性化する仕掛けづくりが重要です。つまり新しい市民社会づくりの要としての、こうした活動と技法は「アートマネジメント」と呼ばれ、文化行政、文化施設運営、企業メセナ、ＮＰＯなどの分野で必要とされています。またプロとしてのアートマネージャーを養成するだけでなく、自覚的市民の新しい「教養」でもあります。さらにアーティストを目指す人にとっても、自分の活動の意味を社会に対して説明し、自己マネジメントできる能力が不可欠です。この講義では、グローバル化時代の先進的文化政策と、その実践技法（アートマネジメント）を学びます。

○藤野一夫 先生

一九五八年東京生まれ。早稲田大学、立教大学、埼玉大学、学習院大学、ハイデルベルク大

学で、哲学、芸術学、ドイツ文学を学ぶ。一九八九年より神戸大勤務、現在、国際文化学部および大学院総合人間科学研究科教授。芸術文化環境論、表象文化思想論、文化環境形成論等を教える。ハンブルク音楽大学客員教授、大阪大学大学院、大阪教育大学、放送大学等の講師を歴任。

◎リトミック（火曜日一限）

ダルクローズ・リトミック（Dalcroze Eurhythmics）は十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて活躍したスイスの作曲家エミール・ジャック＝ダルクローズによって考案された音楽教育法で、音楽を身体の動きを通して経験し学んでいくというユニークなものである。本講座では、様々な身体運動を使ったアクティビティー（活動）を通してダルクローズ・リトミックの基本を学びながら、実際に子どもに楽器や音楽を教える際にダルクローズ・リトミックをどのように応用できるのかについても考える。

○田村朋子　先生

神戸女学院大学英文学科卒、ボストン大学大学院、ロンジー音楽院修了。ダルクローズ・サーティフィケイト取得。現在、神戸女学院大学、関西外国語大学短期大学部講師。

◎アウトリーチ（実習）（金曜日一限）

演奏家には三つの段階があるように思います。一つ目は演奏家自身が「演奏する」ことで精一杯で、お客さんのことを考える余裕がないまま演奏してしまう状態。二つ目は演奏家がお客さんに伝えたいことを、お話やパフォーマンスで補いながら、楽器や曲の特徴をたくさん勉強していく時期。そして三つ目は言葉や余分なパフォーマンスを用いずとも、お客さんに自然に演奏者の心が伝わっていく境地。

アウトリーチの授業では、いろいろなコンサートを実際に体験することによって、演奏者が共演者と楽器、そして聴衆と自然にコミュニケーションがとれるようになることを目的としています。みんなでアイディアを出し合って、すてきなコンサートを計画しましょう！

○絹田朋子　先生

神戸女学院大学音楽学部卒、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ修士課程修了。英国のライブ・ミュージック・ナウ！にて日本人初の認定演奏家として活動中。神戸女学院大学非常勤講師。

アウトリーチ・センター　スタッフ紹介

スタッフ五名全員が神戸女学院大学音楽学部の卒業生で、うち三名が「音楽によるアウトリーチ」一期生です。音楽プログラムを一つ一つていねいに手作りしてお届けするために、スタッフ五名が週五日（月～金曜日、八時五十分～十七時五十分）サポートいたします。みなさまと音楽の素敵な出会いをお手伝いできますことを、スタッフ一同、心よりうれしく思っています。

スタッフ全員が現役の演奏家としてバリバリ活躍中ですので、一言ずつ紹介します。

早野紗矢香（オルガン）＊二ヶ月に一度のペースで解説付きのコンサートを開催し、オルガンという楽器を身近に感じていただけるよう活動しています。様々なコンサートにも出演しています。

寺澤彩（ハープ）＊オーケストラなどでの演奏を中心に活動しながら、ソロ・リサイタルの開催を目標に、日々励んでいます。

松川峰子（ピアノ）＊ソロ演奏の他、声楽や合唱団の伴奏ピアニストとしても活動中。昨年の「子どものためのクリスマス・コンサート」では企画を担当しました。

中村公美（コントラバス）＊三ヶ月に一度、シリーズでロビーコンサートを企画して好評を頂いています。来年一月、兵庫県立芸術文化センターにてデビュー・リサイタルを開催予定です。

革島玲奈（ピアノ）＊様々な楽器と共演するアンサンブル・ピアニストとして、また学校や病院でのコンサートなど、地域に根ざした活動にも力を入れています。

後列左から：松川峰子、早野紗矢香、中村公美
前列左から：寺澤彩、革島玲奈

♪ 今後の予定 ♪

◎アウトリーチ
5 月 12 日（金）
大阪市立総合医療センター・アウトリーチ

5 月 26 日（金）
兵庫県立こやの里養護学校訪問部遠足
（女学院訪問、ミニ・コンサート）

6 月 16 日（金）
五嶋みどり・養護学校プロジェクト
協力：兵庫県立こやの里養護学校

＊　＊　＊　＊　＊

◎ワークショップ
7 月 3 日（月）～14 日（金）
エドワード・ビーラウス先生ワークショップ
「アウトリーチ基礎教育」

◎子どものためのコンサート・シリーズ
7 月 1 日（土）
「子どものための七夕コンサート」

10 月 21 日（土）
「子どものためのオルガン・コンサート」

12 月 16 日（土）
「子どものためのクリスマス・コンサート」

＊　＊　＊　＊　＊

◎学会参加
6 月 17 日（土）
音楽表現学会シンポジウム
於：岡山大学
「音楽家の活動～コミュニティ・エンゲージメント～」

♪音楽をお届けします♪

「音楽によるアウトリーチ」

「アウトリーチ」とは、「一歩踏み出すこと」「手をさしのべること」。
大学やホールといった従来の枠にとらわれずに、社会のさまざまな場にすてきな音楽のプログラムをお届けします。

♪小中学校へ：総合的学習支援プログラムとして、子どものための楽しい体験学習を！

♪病院や美術館へ：催しの趣旨に沿った手作りの音楽プログラムを、心をこめてお届けします。

お問い合わせは…
神戸女学院大学音楽学部 アウトリーチ・センター
〒662-8505 西宮市岡田山 4-1　　TEL＆FAX ： 0798-51-8584
E-mail：outreach@mail.kobe-c.ac.jp　　http://www.kobe-c.ac.jp/musicdp/outreach/

♪ 編集後記 ♪

新年度、心新たに取り組みます！（早野）

新年度を迎え、さらにパワーアップしたアウトリーチにご期待下さい！（寺澤）

新年度が始まりました。昨年度の経験を生かして、よりよい活動ができるようがんばります！（松川）

どうぞお気軽に、アウトリーチ・センターにお声をかけて下さいね。（中村）

今年度は音楽とのどのような出会いが待っているのでしょうか！？楽しみです。（革島）

花の季節を迎えました。アウトリーチでもすてきな音楽の花をたくさん咲かせましょう。（津上）